同朋大學佛教文化研究所報

第36号

発行日　令和五年三月三十一日
編集・発行　同朋大学佛教文化研究所
代表者　安藤　弥
〒四五三-八五四〇
名古屋市中村区稲葉地町七の一
TEL〈〇五二〉四一一-一三七三
FAX〈〇五二〉四一一-一三六九
e-mail : bc-inst@doho.ac.jp
（題字は池田勇諦元学長）

親鸞聖人の「同朋」
――「立教開宗」を考える

所長　安藤　弥

二〇二三（令和五）年に「親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年」を迎えるにあたり、この機縁の意味を考えつつ、同朋大学佛教文化研究所（以下「研究所」）における学術研究の取り組みについて述べます。

研究所は、昭和五十二（一九七七）年の設立以来、同朋大学の学祖住田智見先生の史学を重視する学風と、初代学長稲葉圓成先生が示された「ひろく仏教文化の研究と興隆に寄与し、もって地域社会に貢献する」という方針に基づき、真宗史・仏教文化研究に取り組み続けてきています。なかでも、親鸞（一一七三～一二六二）とその門弟集団の由緒を持つ寺院を「真宗初期遺跡寺院」と呼称し、現地訪問を中心とする研究調査活動を、現在に至るまで約四百回、積み重ねてきました。

そこで、いつも議論されてきたのが、「親鸞とその門弟集団」の歴史的性格でした。これは日本中世・宗教社会史の重要な課題であるとともに、浄土真宗の重要な論点がそこにあると考えます。

浄土真宗の宗祖とされる親鸞が承安三（一一七三）年の誕生であることは、その複数ある自筆聖教の識語に年時と年齢が明記されていることからの逆算で、確定的に言われています。この一人の人間としての「親鸞誕生」が「浄土真宗」の「立教開宗」に結実します。親鸞の主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』の化身土本巻に「我が元仁元年甲申」とあることから、五十二歳に相当する元仁元（一二二四）年頃には、浄土真宗の根本聖典となる『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』の内容がほぼまとまっていたのではないかと考えられています。

そこで元仁元年に「立教開宗」の意味が見出されてくるのですが、親鸞の「立教開宗」をめぐっては、たとえば楠信生「真宗開顕」（『教化研究』第一六五号、二〇一九年）において五点の意味が確かめられ、その最後に、念仏の教えの連続無窮、僧伽への志願があったと示されます。受けとめ直せば、親鸞における「立教開宗」に、「同朋」（ともに仏の教えを聞く仲間）、すなわち門弟の出現が重要な意味を持つと言うことができましょう。『教行信証』の執筆は、ともに教えを聞く「同朋」の存在あってのことと考えるものです。

親鸞は法然を師とし、その教えこそを「浄土真宗」と受けとめました。そして、「弟子一人も持たず候」（『歎異抄』第六章）という言葉が知られますが、歴史的実態としては親鸞の門弟集団が出現し、そして、その系譜を受け継ぐ「初期真宗門流」集団が後世、多彩に展開しました。「念仏の教えの連続無窮」は、関わるすべての歴史あってのことです。今回の機縁に研究所編『親鸞・初期真宗門流の研究』（法藏館）を刊行します。研究所設立四十五年目の成果であり、かつさらなる取り組みの出発点にしたいと考えています。

知の権力性・暴力性――専門家の陥穽

玉井　威

そもそも「知」は、現象を客体として分析・分節化し、名づけ（言葉化し）、操作し、分類したりする働きを持つ。つまり「知」は現象を分析対象、操作対象として位置づけ、そして我々の了解可能なまでにそれを分析し、細分化し、操作して意味づける。これはまさに科学の持つ「知」に他ならない。いわば現象を解体し、細分化することで、部分を全体から切り離すのだと言ってもよい。

科学知はまた、対象と自己とを切り離すことによって成立する。つまり、切り離すことで対象と自己との間に距離ができ、外から客観的な観察が可能となる。科学知はいわば「私」抜きの知と言えよう。自然を対象とする自然科学の知はまさしくこのような知である。

社会科学の場合も、社会現象を対象として、このような客観的な知の追及を目指す。社会科学に位置づけられる社会福祉学も、伝統的にはこのような性格を持つが、同時に、社会福祉学は目の前の、現に苦しんでいる人々を、臨床的に、対症的に支援していく性格を有する。その社会福祉学において科学知・操作知が持ち込まれた場合、客体としての対象（人）を支配し、抑圧し、科学「知」のもとに対象を服従させる虞（おそれ）がある。

いかなる分野であれ、専門家は専門知（言葉）を有し（知の所有者）、まさにその専門知のゆえに、さまざまな現象を常に対象化して、その全体性を分析し、解体し、操作するのであるが、対象が人に向かう場合、専門家は、その特権的な知のゆえに、対象（相手）から言葉を奪い、対象（相手）を弱体化し、無力化する虞がつねにある。ましてや、制度や社会構造との関係において、パワーの欠如した状態におかれ、社会的に抑圧されたいわゆる「社会的弱者」を対象とする社会福祉の場合は、この「知」の持つ権力性、暴力性を常に心しなければならない。

社会福祉はそのような人にパワーをつけてもらうこと（empowerment）を目指すはずなのに、逆に相手の力をそぎ、相手を無力化すること（disempowerment）になってしまう。クライエント―ワーカーという関係は、もともと「知」というパワー（権力）という点で不平等であり非対称である。自らを専門の援助者、ワーカーとして位置づけ、被援助者、クライエントを操作対象としてパターナリスティクにかかわっていくとき、その「知」の権力性・暴力性の問題が発生するのである。被援助者（客体）の側から言えば、自分が何者であるのか、自分は何をすべきかの判断・決定（自己決定）が奪われ、専門家である他者の手にゆだねてしまうことになるのである。

これが専門家と言われる人たちの心すべき陥穽である。

〔付記〕本稿の内容は、筆者が二〇一六（平成二十八）年まで所属していた本学の社会福祉学部と大学院人間福祉研究科において、授業に際し、学生・院生に語ったものです。

筆者は、かねてより、フランスの哲学者ミッシェル・フーコーの言う「知に内在する権力の働き」に関心を持ち、刺激を受けてきました。また、インドの仏教論理学者ディグナーガのアポーハ論（語はその意味を「他の排除」によって表す）に影響されて、知のもつ権力性、排他性、暴力性に関心を持つに至り、そこから将来、福祉の現場で福祉の専門家として働く学生・院生に、心すべきこととして、語ったものです。

◎千枝大志・川口淳編『これであなたも歴史探偵！歴史資料調査入門（爽ＢＯＯＫＳ）』（風媒社、二〇二二年八月）刊行。東海三県の具体的な資料を読み解く実践を通して、歴史資料と向き合うヒントを与えてくれるガイドブックです。

徳川（松平）家臣団と浄土真宗についての覚書

安藤　弥

はじめに

二〇二三（令和五）年NHK大河ドラマ「どうする家康」の放送を機縁として、関連するさまざまな研究課題が注目されている。ここでは「徳川（松平）家臣団と浄土真宗（一向宗）」の関係について寸考を提示しておきたい。この課題は特に三河一向一揆（一五六三～四年）に関係して、すでに注目されてきたが、現時点では、研究の進展を受け、理解の仕方について、あらためて考える必要性があるように感じられる。なお、すべての事例に触れる紙幅は無く、（一）石川氏、（二）本多氏、（三）渡邉氏の主要な内容に絞って述べることにしたい。

（一）石川氏

家康の重臣であり、後に豊臣秀吉方に出奔する石川伯耆守数正（？～一五九二）が一般的には著名であるが、浄土真宗との関係についてはその祖父安芸守清兼（？～一五七八）から注目していく必要がある。

清兼は松平清康・広忠に仕えた重臣であったが、その一方で真宗史・地域史上、著名な野寺本證寺門徒連判状（一五四九年）にも筆頭者としてその署名が見出せる人物である。松平家臣でありかつ本願寺門徒という、いわゆる〝門徒武士〟の典型的なありようを示す存在であった。

そして、この清兼の妻が刈谷水野氏出身で、家康の伯母に当たる妙春尼（妙西尼）であり、彼女も本願寺門徒であった。三河一向一揆後、僧侶追放中の国内において在地門徒を統括し、二〇年後の「一向宗」赦免（一五八三年）にも尽力して実現させるといった、きわめて重要な役割を果たす人物である。

こうした清兼と妙春尼の間に生まれたのが石川日向守家成（一五三四～一六〇九）であったが、彼は三河一向一揆の際、家康配下で戦った。一揆の最終局面で一揆方の最高拠点であった土呂本宗寺「寺内」に入って和睦を伝え、立て籠っていた門徒武士達を従えている。一揆後、家康家臣団において西三河の旗頭となりさらに活躍した後、その地位を甥の数正に譲ることになる（一五六九年）。家督を息子に譲り（一五八〇年）、三河「七か寺」赦免（一五八五年）の際には、野寺本證寺の「寺内」領域の再確保に関与していることも注目される。

家成の甥である数正も三河一向一揆の際、家康方で戦い、一揆の後に本宗寺が退去した土呂に城を構え拠点にしたという。土呂はもともと石川氏ゆかりの地であり、そうであるがゆえに本宗寺が創建されたとも言われる。数正の秀吉方への出奔が「七か寺」赦免の直後であること、彼の葬儀が京都七条河原で行われたことを本願寺に寄寓する山科言経がその日記に記すことなどには、数正と浄土真宗の関係についても、何か検討課題があるようにも思われる。

（二）本多氏

家康の家臣としては、いわゆる〝徳川四天王〟に数えられる本多平八郎忠勝（一五四八～一六一〇）、そして三河一向一揆の際、一揆方で戦い、敗北して追放後に帰参して家康の側近となる本多弥八郎正信（一五三八～一六一六）が一般的にも著名であろう。

本多正信について、少し詳しく確かめると、三河一向一揆において正信が立て籠った場所は酒井忠尚が拠点とした上野城である（『松平記』『三河物語』）。正信の父俊正が酒井忠尚に仕えていた所縁であろう。その意味で正信が最初から本願寺門徒であったという確証は得られない。なお、正信の弟である三弥正重は三河「三か寺」の一つ、針崎勝鬘寺に立て籠って戦い、家康方の大久保忠世と鉄砲で撃ち合い、撃ち負けている（『三河物語』）。

正信は一揆後、国外に出て加賀国に住んだという（『寛政重修諸家譜』）。

加賀は実質的に本願寺領国であり、所縁の深まりを感じさせる。家康配下に帰参して後のこととして、よく触れられるのは、「関ケ原の戦い」（一六〇〇年）の後、家康と教如の対面に正信も同席し、そこで家康に本願寺の東西分派を認めるよう進言したことである（『宇野新蔵覚書』）。さらに正信は、東本願寺創建にあたってその御影堂に安置する「御真影」を関東の妙安寺から移譲する際にも口添えをしている（妙安寺文書等）。

そして、もっとも注目すべきは正信の死去（一六一六年）にあたり、東西両本願寺に本多家から志納金があり、両寺ともに七月十八日から法要を勤めていることである（『元和日記』『重要日記抜書』＊1）。これは表記からして正信自身の遺志に基づくものである。なお、正信系本多家は江戸神田徳本寺（浄土真宗）とのゆかりが深く、江戸時代には本多正信夫妻が篤信の本願寺門徒であったという伝承が増幅されていく。

＊1拙稿「三河一向一揆」（『徳川家康合戦録』星海社新書、二〇二二年一一月）で「正信の葬儀は東本願寺で行われているから」としたのは誤記であり、訂正する。

ところで、あまり広く知られていないようであるが、本多忠勝も浄土真宗との所縁がある。前述した『宇野新蔵覚書』には正信だけでなく、忠勝のことも触れられている。三河一向一揆の際、忠勝は本願寺門徒にはならないという一札を出したが、内心は贔屓であったというのである。

忠勝の本多家は桑名の浄土寺（浄土宗）を菩提寺とし、同寺に忠勝の墓もあるが、忠勝はまた、かつて土呂にあった浄専寺という真宗寺院も菩提寺の一つとしている。浄専寺は忠勝系本多家が江戸時代に転封するたびに従って移動し、最後は岡崎城下に落ち着くことになる。それが現在の元能見浄専寺であり、忠勝の父の名にちなみ忠高山を号している。なお、土呂にも浄専寺が再興し現存している。

（三）渡邉氏

渡邉半蔵守綱（一五四二～一六二〇）がよく知られるが、彼は三河一向一揆の際には家康家臣を離れ、針崎勝鬘寺に立て籠り一揆方で戦っている。勝鬘寺の南方（土呂より少し南西）の浦部村出身という地縁もあったであろうが、渡邉一党をあげて本願寺門徒だったようである。

守綱の武勇は同じく槍の名手とされた蜂屋半之丞貞次とともに伝えられているが、守綱以上に奮戦したのがその父高綱だったと言える。高綱は出撃して来た家康に対しても退くことなく戦い、拮抗した後、最後は家康方にいた、自身の甥である内藤甚市に弓で射られて致命傷を負い、息子の守綱にかつがれて勝鬘寺に戻ったが、そのまま落命したという（『松平記』）。勝鬘寺には高綱の墓が伝えられている。

守綱は一揆後、平岩善十郎（親吉の弟）の取次で許されて家康配下に帰参し、数々の武功を挙げていくことになる。最後は家康の直命により家康九男義直の付家老とされ、尾張徳川藩を支えていくことになる。守綱は死後、名古屋の興善寺（浄土真宗）に葬られるが、息子の重綱、孫の治綱により、三河寺部に守綱寺が創建され、遺骸も移される。さらに名古屋城下にも守綱寺が創建され、両寺とも渡邉半蔵家の帰依を受ける。渡邉半蔵家の当主は歴代、篤信の門徒であったという＊2。

＊2松金直美「尾張門徒の報恩講」（『名古屋御坊』第六七七号、二〇二二年一二月）において、『妙好人伝』に所収される「尾州渡邉氏」の逸話が紹介されている。

おわりに

以上、石川・本多・渡邉三氏の主要な内容のみ手短に紹介してきた。このほかにも、たとえば三河一向一揆時における夏目広次（吉信）の葛藤、「七か寺」の一つである中之郷浄妙寺の赦免と寺地安堵に関する酒井左衛門尉忠次の尽力など触れるべき点は多くある。ここで最後に述べておきたいのは、現代的な感覚で「改宗」「非改宗」といった語句を用いて捉えるのではなく、あくまで全体を通した〝関係の持ち方〟の度合いで実態を把握していくことが重要であろうということである。

《研究会活動報告》

アジア仏教研究会

武田　龍

開催日：4／27　5／27　6／20　7／21　9／28　10／27　12／12

参加者：玉井　威・武田　龍・蒲池勢至

『法華経』法師品まで読み進めた。

大乗経典は仏教混淆梵語で書かれたものが多い。純正なサンスクリットを自在に使いこなす知識人が多いサンガで編集されたのであれば、洗練されたサンスクリットの経典が成立した筈である。混淆は起こらない。筆者は別の可能性を考える。大乗経典は俗語主体の言語習慣のなかで成立した経典ではないのか。

口誦による伝承では、発音や語法など地域語の影響を受けざるをえなかったと考えられる。仏教の中心地が徐々に西方に移るにつれ、釈尊の教説は、口誦されるうちに、発音も語法もそれほど変わらない範囲内で隣接のよく似た地域語に少しずつ置き換えられていったようである。

仏教の初期には、サンガ内の通用語と聖典語は同一であった。大乗仏教興起の頃の仏教サンガはインド亜大陸の各地に分立しており、僧たちは各自の生得の言語をサンガに持ち込んだと思われる。サンガ内はいくつかの地域語が混じる状態となり、意思疎通には生得の言語の制約を超えて相互理解を可能にする通用語が必要になったと考えられる。地域語の要素を多く取り込んだ混成語が通用語となり、サンスクリット一辺倒になることはなかった。

さらに聖典語と通用語とは区別された。これは僧たちが聖典の言葉に自分たちの言語から隔たりを感じるようになり、区別する意識が生じて起こったことのように思われる。大乗経典は通用語などが反映した言葉遣いの文章になったと考えられる。

アジア仏教研究会分科会

玉井　威

コロナ禍でしばらく休会を余儀なくされたが、再開後は、従前どおり「ミリンダ王の問い」（東洋文庫）を中心テキストとして読み進めている。読み進めていく中で、本書の古層部（パーリテキスト89頁まで）に見られた「インドとギリシャの思想対決」の様相が影を潜め、もっぱら当時教団内で問題とされた議論が展開され解決が図られ、一種のカテキズムの感を呈している。例えば、ブッダの全知性（一切知）を問題とするとき、よく議論されるブッダの苦痛の感受の問題がある。すなわち、ブッダは一切の不善を焼き尽くし一切知者たる境地に至った存在であるのに、最後の旅の途上、ブッダが鍛冶工チュンダの接待を受け、下痢の苦悩が生じたと伝えられているのは矛盾していないかという。不善業の焼尽と苦痛の感受の存在との二律背反性が議論されるわけである。ミリンダ王が疑問を呈し、ナーガセーナ長老がこれに答えるという形をとっている。ブッダ在世中はこういう問題は起こらなかったと思われるが、ブッダ亡き後、ブッダの常人との隔絶性、超人性が進んだことが、こうした議論が出現する大きな要因になったと想像される。キリスト教で言えば、イエスの神性（全知性）を疑う議論と比較できよう。また、この議論の中で、苦しみの原因として八つあげられる中で、「風」と「胆汁」と「痰」が出てくるのはアーユルヴェーダの影響かと思われる。これがまたギリシャの四性論につながるのも興味深い。

真宗史研究会

安藤　弥

今年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第四六回）
【日時】九月二日（金）一四時～
【報告者】祢津宗伸氏
【題目】「高田本、琳阿本、康永本の異同からみた親鸞伝絵の成立過程
　　―琳阿本詞書覚如直筆説の検証―」

第二回目（通算第四七回）
【日時】二〇二三年二月二十四日（金）一四時～
【報告者】青木馨（客員所員）・安藤弥（所長）
【題目】「戦国期浄妙寺文書の基礎検討」

祢津氏は、本会三回目の研究報告となる。今回は、いわゆる「親鸞伝絵」の成立過程について、高田専修寺本、琳阿本（西本願寺本）、康永本（東本願寺本）の筆跡の異同から研究する内容で、特に琳阿本の詞書が覚如の直筆であるという問題提起がなされた。

青木・安藤は、近時の調査で確認された愛知県岡崎市浄妙寺所蔵の戦国期文書七点の内容を検討した。特に天正十三年と推定される文書群の内容から、三河一向一揆後の赦免において、浄妙寺の「寺内」（寺領）がどのように扱われたのかという論点に注目し、三河三か寺に次ぐ位置に浄妙寺があったことを議論した。

次年度も引き続き、二回程度の研究会を行いたいと考える。

「東アジア仏教思想史」研究会

市野　智行

開催日：5／29・9／8・9／9・12／27・1／9
メンバー：市野智行・織田顕祐・藤村潔・川口淳・黒田浩明

二〇二二年度も、昨年に引き続き、開催形式を午前・午後（全日）の日程に変更し実施した。年間通しての開催日数は少ないものの、集中的に行うことで実りある研究会を開催することができた。

研究会の持ち方は、曇鸞の『無量寿経優婆提舎願生偈註』（以下、『浄土論註』）をテキストとして、何よりも原文をじっくりと読むことを基本としている。というのも今日の曇鸞研究が親鸞の視点を含めることによって、「読みすぎてしまう」傾向にあるからである。曇鸞の生きた時代の中で、また曇鸞に与えたであろう影響（般若経・維摩経・十地経・華厳経・大智度論など）を加味しながら、大乗仏教の大きな流れの中で、『論註』を読みたかったのである。そして、本年度ようやく読み終えることができた。『論註』を『論註』のまま読むことで、見えてきた課題がいくつかある。たとえば、「回向」や「五念門」といった術語の背景に大乗仏教の大きな展開がある事や、『論註』の組織そのものについては実は十分な議論がなされていないこと、などである。

次年度は研究会を通して浮上した課題に対し『曇鸞『論註』新研究』（仮）と題した研究論集を刊行したいと考えている。その第一歩として十二月二十七日の研究会では、参加者による発表が行われ、課題の共有を行った。

「近代戦争下の学術調査と人的交流」研究会

藤井由紀子

メンバー：藤井由紀子・川口淳・中川剛・日比野洋文・花栄

残された史資料に基づき、現地調査を踏まえつつ、日中戦争下に行われた学術調査の歴史的意義を探る。これが本研究会の本来の活動趣旨であるが、昨年度の報告で述べたように、新型コロナウイルスによる環境変化を鑑みて調査方針を見直し、研究会の主軸である西蔵寺蔵「小川貫弌資料」を中心に、「コロナ禍下での資料共有方法の構築」というテーマのもとで本年度も活動を行った。具体的には、「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫弌の記録―」と題して、画像データベースの形で一部資料をＷｅｂ上で公開し（https://sites.google.com/view/doho-bukken-ogawadocuments）、戦時下の学術調査関係資料を共有するためのプラットフォームづくりの基礎を固めた。また、「小川貫弌資料」南京関係資料のデジタル化作業と並行し、２０２２年12月初旬、同朋学園名古屋キャンパスＤｏプラザ閲蔵１Ｆギャラリーにおいて、「戦時下の中国仏教研究Ⅲ―南京仏学院と「亀谷法城資料」」展を開催した。

「日本仏教の成立と展開」研究会

（活動継続中）

教行信証学習会

吉田　暁正

講師：森村森鳳（張偉）先生
趣旨：漢文として『教行信証』を読む
会場：同朋学園名古屋キャンパスＤｏプラザ閲蔵２Ｆ多目的会議室
テキスト：東本願寺出版『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）

開催日：５／26　６／23　７／28　９／29　11／24
　　２０２３年　１／26　２／16

『教行信証』の読解において、親鸞が言葉の中に込めたメッセージを確かめるように学習を進めている。特に、親鸞の言語表現、文字への厳密さに注目して読むこと、また、その表現の中に込められている重層的な意味を読み取ることを意識しながら読解を進めている。

今年度は、「信巻」における「八番問答」について学習を進めた。「難化の三機・難治の三病」として五逆、謗法、一闡提の三種のものがどのように救われていくのか、『論註』の八番問答を引用された親鸞の意図を確かめながら読み進めている。

二〇二二年度彙報

《研究所構成メンバー》

所　　長　安藤 弥
所　　員　箕浦尚美（人文学科）　岩瀬真寿美（社会福祉学科）
　　北島信子（社会福祉学科）
所員・幹事　市野智行（仏教学科）
研究顧問　小山正文　小島惠昭　蒲池勢至　玉井 威
所員（非常勤）　千枝大志　川口 淳
客員所員　青木 馨　飯田真宏　上島 享　塩谷菊美　大山誠一
　　大艸 啓　岡村喜史　花 栄　北畠知量　ギャナ・ラトナ
　　黒田龍二　嘉木揚凱朝　脊古真哉　曽根原 理
　　新野和暢　武田 龍　服部 仁　藤井由紀子　藤村 潔
　　ブレニナ・ユリア　松金直美　吉田暁正　吉田一彦
客員研究員　老泉 量　川村伸寛　木全琢麿　周夏　高木祐紀
　　中川 剛　日比野洋文　松山 大
特別研究員　小谷峻示

《所員会議》

4／18　5／16　6／14　7／19　9／20　10／24
11／8　12／5　1／17　2／7

《公開講座等》

・現地で学ぶセミナー：前期・後期とも今年度は中止

《ギャラリー史料展示》（会場＝Doプラザ閲蔵一階ギャラリーDo）

・前期（7／9～7／22）〔担当〕千枝大志・川口淳
「すり出されたカミ・ホトケ―出版からみた仏教文化―」展
・後期（12／5～12／14）〔担当〕藤井由紀子
「戦前下の中国仏教研究Ⅲ―南京仏学院と「亀谷法城資料」―」展

《史料調査活動》

・真宗寺院史料調査　※本誓寺調査は初期真宗研究会の調査を兼ねる。
4／15～4／17　本誓寺（真宗大谷派・岩手県盛岡市）
4／25　一乗寺（真宗興正派・愛知県額田郡幸田町）
8／24～8／26　本誓寺（真宗大谷派・岩手県盛岡市）
12／27　阿弥陀寺（真宗大谷派・茨城県那珂市）
・寄託史料の整理調査（養念寺）
・学園史関係資料の再確認

《特別活動》

・研究所所蔵フィルム史料のデジタル化作業
・アーカイブズ関連実習
・くずし字解読学習会の実施（学芸員課程履修学生希望者対象）
11／29　12／13　1／10　2／7
・随時、研究所への学術的来訪・打診へ対応

◎同朋大学仏教文化研究所編『親鸞・初期真宗門流の研究』（法藏館、二〇二三年三月）刊行。本論集刊行のために「初期真宗研究会」を立ちあげ、「真宗大谷派宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業学術研究助成」を頂戴して取り組んだ成果をまとめました。記して関係各位に甚深の感謝を申しあげます。
〔付記〕本所報の巻頭言は『親鸞・初期真宗門流の研究』の緒言の文章内容を抜粋・再編集して掲載したものです。